

5.2 特別支援教育における ICF 及び ICF-CY 活用方法（試案）の提案について

教育支援部 主任研究員 徳永亜希雄

教育支援部 総括研究員 松村 勘由

平成 21 年度特別支援教育研究研修員 加福千佳子

（青森県立弘前第一養護学校 教諭）

平成 21 年度特別支援教育研究研修員 小林 幸子

（静岡県立中央特別支援学校 教諭）

はじめにー ICF 及び ICF-CY を活用する前に確認したいことー

「1.2」で述べたとおり、特別支援教育における ICF 及び ICF-CY（以下 ICF/ICF-CY）活用のためには、実用性の高い学校現場での方法論の整理の必要が指摘されて（徳永他，2008）きたことを踏まえ、本研究を進めてきました。しかしながら、「3.2」で述べたとおり、特別支援教育において ICF/ICF-CY を活用する際は、活用方法の以前に、それぞれの学校等で ICF/ICF-CY を活用するための改善・充実させるべき教育活動上の何らかの課題等があり、そのための手段として ICF/ICF-CY を位置づけながら、活用していることがこれまでの活用状況から示唆されています。

事にしたいことは、ICF/ICF-CY が先にあるのではなく、特別支援教育実践が先にあり、そのための改善・充実等のための手段の一つとして、ICF/ICF-CY が位置づくということです。したがって、活用における背景、すなわち現状の分析とそのことについて関係者間での共通理解がまずは重要だと考えます。例えば、「2.2」の中では、子どもを見るときに、診断名の枠で最初から捉えようとする傾向への違和感や関係者間の共通理解等の弱さ等への意識、そしてその改善をしたいという思いが背景にあることが分かりました。それぞれの現状を踏まえた上で、次のような観点で、活用について考えていきたいと思えます

1. ICF/ICF-CY を活用する際に確認すること

まずは、①何のために活用するのか（目的）ということを明らかにしていく必要があります。例えば、より豊かに子どもの実態を把握するために、あるいは職員間や保護者間で子どもについて共通理解を深めるために、等です。

次に、②いつ・どこで（場面）、③ ICF/ICF-CY のどんなところを（観点）活用するのか、をそれぞれ明らかにしていくことが大事になります。例えば、個別の教育支援計画において個々の教育課題を明らかにする場面において、ICF/ICF-CY の多面的・総合的な概念的枠組みを用いての子どもについての情報を整理した図（ICF 関連図）を用いる等です。

「2-3」で述べたとおり、活用の仕方は各校において多様ですが、特に学部や学校等、組織的な取り組みをする場合は、これらの点と活用の結果、期待される成果を共通理解しておくことがと

でも大切だと考えられます。参考までに、①目的、②場面、③観点の例を以下に挙げます。これは、「2.3」の調査において、各校の活用状況を尋ねる際に用意した選択肢です。これらは、それまでの実践報告等を整理した上で作成したものです。

(1)「活用の場面」についての選択肢

- ①個別の教育支援計画（個別の移行支援計画を含む）において
- ②個別の指導計画において
- ③授業の計画段階において
- ④個別の教育支援計画や個別の指導計画、授業計画等の中の整理において
- ⑤授業の振り返り段階において
- ⑥進路指導において
- ⑦自立活動の指導において
- ⑧交流及び共同学習において
- ⑨寄宿舎において
- ⑩センター的機能による地域支援において
- ⑪事例検討会において
- ⑫話し合いや面談において
- ⑬学校での指導内容表等の検討において
- ⑭統計的な情報の整理において

(2)「活用の目的」についての選択肢

- ①幼児児童生徒自身の自己理解のために
- ②幼児児童生徒の相互理解のために
- ③幼児児童生徒の実態把握のために
- ④幼児児童生徒の実態から課題の抽出を行うために
- ⑤幼児児童生徒の目標設定のために
- ⑥幼児児童生徒への指導・支援内容や方法の検討のために
- ⑦幼児児童生徒への指導・支援後の評価のために
- ⑧幼児児童生徒の在学中の先の姿をイメージするために
- ⑨幼児児童生徒の卒業後の姿をイメージするために
- ⑩教職員間の共通理解・連携のために
- ⑪保護者との共通理解・連携のために
- ⑫校外の関連機関・関係者等との共通理解・連携のために
- ⑬幼児児童生徒に関する情報を資料として引き継ぐために

(3)「活用の観点」についての選択肢

- ①心身機能・身体構造、活動、参加という生活の機能に加え、環境因子や個人因子等を含めて多面的・総合的に人を理解するという考え方
- ②「健康状態」を重視する視点
- ③「心身機能・身体構造」を重視する視点

- ④「活動」を重視する視点
- ⑤「参加」を重視する視点
- ⑥「環境因子」を重視する視点
- ⑦「個人因子」を重視する視点
- ⑧ ICF の概念図を模した図（以下、「ICF 関連図」）を用いて幼児児童生徒の情報を整理する方法
- ⑨「ICF 関連図」等で幼児児童生徒に関する複数の情報を関連づける方法
- ⑩「ICF 関連図」作成作業を共有する方法
- ⑪作成された「ICF 関連図」を共有する方法
- ⑫「ICF チェックリスト（独自に創意工夫したものを含む）」等により ICF 又は ICF-CY の分類項目を活用している
- ⑬チェックリストではなく、ICF 又は ICF-CY の分類項目そのもの
- ⑭ ICF 又は ICF-CY の分類項目の評価点

2. 活用する際の共通理解の手立ての例

これまで共通理解の必要性について述べてきましたが、最初からこれらがきちんと押さえられ、見通しをもって取り組まれるのが理想的とはいえ、実際には難しさもあると思います。

次に示した表は、本研究所の専門研修の研究協議の中で、研修員（特別支援学校教諭）と共に検討したマトリックスの例です。「2.3」において、特別支援学校で最も多く ICF/ICF-CY が活用されている場面は個別の教育支援計画であることを述べました。しかしながら、「個別の教育支援計画における ICF/ICF-CY 活用」とは必ずしも一元的ではありません。実際の研究協議においても、何となく議論がかみ合わない感じがあり、その原因を確認するために作成したのが次の表です。

まず、個別の教育支援計画については、各校・各自治体等によって多様であり、一般的なところとしては、その過程には実態把握・課題設定・目標設定・介入計画立案・事後評価等、様々なステージがあります。一方、ICF/ICF-CY についても、概念的な枠組み・「参加」から見る視点・分類項目の活用・話し合いでの「関連図」活用・多職種間での共通言語としての活用等、様々な観点があります。

したがって、実際の活用にあたっては、個別の教育支援計画におけるどのステージで、ICF/ICF-CY のどのような観点を活用しようとしているかの共通理解が必要だと考えられました。次のマトリックスでは、それぞれがどこに注目しているのか、◎や○等を記入し、互いに確認し、話し合うことによって、共通理解を図ることができると思います。この例は、ICF/ICF-CY 活用に限らず、いろいろな場面でも使える考え方ではないかと思います。

表 ICF/ICF-CY を個別の教育支援計画で活用する際のマトリックスの例

		ICF/ICF-CY				
		生活機能・健康状態・背景因子という枠組み	「参加」から見る視点	分類項目の活用	話し合いでの「関連図」活用	多職種間の共通言語としての活用
個別の教育支援計画	実態把握					
	課題設定					
	目標設定					
	介入（支援・指導）計画立案					
	事後評価					

3. 実際の活用を支えるもの

ある学校の研修会で「ICF 関連図」作成に関する演習のようなことをしている際、どうも話がかみ合わない、違和感を覚えることがありました。よくよく尋ねてみると、「ICF 関連図」以前に、ICF のことそのものがよくわからない、とのことでした。その際、以前から ICF/ICF-CY の活用の検討を一緒に進めてきた人たちとの協議の中で出た、次のような話を思い出しました。

「一般的に日本では、紙に書かれた文書等は左上から見始めるのではないだろうか。だとしたら、ICF/ICF-CY のことを知らなければ、参加から見たり、環境因子から見たりすることはあり得ないのではないか。」

前述の研修会のエピソードに照らすと、まさしくその通りだと思います。これまで、ICF/ICF-CY 活用は、それが先にあるのではなく、改善・充実させるべき教育活動上の何らかの課題教育活動等での解決すべき課題が先にあるべきだと述べました。とはいえ、ICF/ICF-CY に関する基礎的な知識がないと、やはり先には進みません。「1.2」で述べたとおり、本研究の前身である ICF/ICF-CY 活用関連研究においても、活用のための研修パッケージの開発の必要性が課題として指摘されています。

本研究所では、本研究とは別枠で、科学研究費補助金研究「特別支援教育における国際生活機能分類児童青年期版活用のための研修パッケージ開発（研究代表者＝徳永亜希雄）」に取り組んでいます。その中でも、研修会の中で、そもそも ICF/ICF-CY がどのようなものなのかについて理解が深まった方が、活用全体に関する分かりやすさが高まることが示唆されました（Tokunaga et al, 2008）。いわゆる「赤本」においては、活用のために研修を受ける必要性を指摘しています。大内（2008）は、イタリアにおける ICF に関する組織的な研修について報告していますが、残念ながら、今のところ日本にはそのような仕組みはありません。

本研究所における専門研修（約 2 ヶ月間、年 3 回実施）においては、共通講義として ICF/ICF-

CY 活用に関する講義を行っています。また、各地での ICF/ICF-CY 関連研修についての研修講師依頼に対して、可能な範囲で対応しています。しかしながら、前者は、各地の指導的立場を担うことが期待された教職員を対象としているとはいえ、人数的に限りがあります。後者は、依頼数の増加に対し、対応が難しくなっているのが現状です。

そのような状況を踏まえ、前述の研修パッケージ開発研究を通して検討を進めるとともに、本研究成果報告書では「解説編」を設け、また、学校現場等での活用に資するために、これまでも本研究所から関連冊子「ICF（国際生活機能分類）活用の試みー障害のある子どもの支援を中心にー」（2005）、「ICF 及び ICF-CY の活用 試みから実践へー特別支援教育を中心にー」（2007）を出版しました。また、本研究所の Web サイトからは、「5.4」で述べている「特別支援教育における ICF 及び ICF-CY 活用に関するよくある質問と答え」や「5.5」で述べている「ICF 及び ICF-CY 活用事例文献データベース」から関連事例のエッセンスについて確認することができます。また、本研究の前身である、課題別研究「ICF 児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究(平成 18 年度～ 19 年度)」成果報告書もダウンロードすることが可能です。実際の活用にあたっては、ぜひこれらを参考にしてください。

一方、「2.2」及び「2.3」の中では、それぞれ活用の課題について調査をしています。これまで特別支援教育において ICF/ICF-CY を活用してきた人等へのインタビューを行った「2.2」では、以前からあったという考えの抵抗感、ICF/ICF-CY ありきの視点、ツールとしての「ICF 関連図」作成の難しさ等の活用を推進する上の内容が指摘されています。これに対し、全国のすべての特別支援学校に尋ねた「2.3」では、ICF/ICF-CY への基本的な理解が難しい、子どもの情報が健康状態、心身機能・身体構造、活動、参加、環境因子、個人因子のどこに含まれるのかわかりにくい、作業が繁雑であるといった基本的な事柄が課題の上位でした。

学校での組織的な取り組みや「ICF 関連図」作成等の場面を想定した場合、中核となる立場が必要ではないかと思われます。前述の「2.2」と「2.3」での回答の違いから、活用の推進の中心的な立場を担う人とそうでない人は課題も異なり、必要となる研修の内容も異なるのではないかと推察されます。したがって、今後は、中核となる立場になる人のためのツール作りや養成にも重点を置くことが必要だと考えられます。

4. ICF/ICF-CY 活用方法の提案（試案）

本研究では、学校現場で活用しやすい方法について検討し、提案していくことを想定していましたが、調査等を通して、活用方法はそれぞれで異なり、その違いはそれぞれの学校等の実情の違いによるものであると考えました。したがって、ここでは、絶対的なものを提案するのではなく、想定される一つの手順について例示する形を取ることにしました。しかしながら、子どもの暮らしについて多面的・総合的な理解がしやすくなる ICF/ICF-CY の活用によって、特別支援学校の目的の一部である「障害による学習上又は生活上の困難」をとらえ、その改善等に関わっていくのに適しているのではないかと考えました。

これまでの繰り返しになりますが、活用方法を考える上で大事にしたいことは、次のことです。

①各学校等の現状を分析し、改善・充実させるべき教育活動上の何らかの課題等を明らかにし、

それらを関係者間で共通理解すること。

- ②そのことの改善・充実のために、ICF/ICF-CYの活用が適切かどうか判断すること。
- ③適切と判断された場合は、活用目的、活用場面、活用するICF/ICF-CYの観点、活用後に期待される成果等を検討し、それらを関係者間で共通理解すること。
- ④活用後、子どもにとって効果があったのか、関係者にとって効果があったのか、効果に見合うコストだったのか、より適切な方向性はどうあるべきか、等の評価をすること。

以下にA 特別支援学校のB君の例を挙げ、具体的に述べます。

○上記①に該当する部分

A 特別支援学校では、これまで子どもの発達段階について丁寧に評価をし、発達を促進する指導を行ってきました。しかしながら、障害による学習上又は生活上の困難については十分に把握できていないということが課題として挙げられ、職員の間でも話題になっていました。

○上記②に該当する部分

このことについて研究部を中心に話し合い、子どもの生活について多面的・総合的な理解がしやすくなるICF/ICF-CYが活用できるのではないかと判断しました。

○上記③に該当する部分

子どもの障害による学習上又は生活上の困難を把握することを目的とし、個別の教育支援計画の実態把握から計画作りの段階にかけて、ICF/ICF-CYの総合的・多面的な概念的枠組み、構成要素間の相互作用の観点を生かし、分類項目も用いながら行ってはどうかと結論づけました。そのことによって、これまで十分に把握できなかった、個々の障害による学習上又は生活上の困難が把握しやすくなり、同時に関係者でそのことを共有しやすくなると思われました。そのことを管理職、各学部等で提案し、一定の理解を得たため、各学部1事例ずつのモデルケースとして、まずは取り組んでみることにしました。

○具体的な取り組み

B君についての既存の情報（引き継ぎ資料、諸検査の結果、参与観察や保護者からの聞き取りから得られた内容等）を、ICF-CYチェックリスト（「2.4」参照、図1）を用いて整理し、その中から、B君の障害による学習上又は生活上の困難を考える上で必要と思われる項目をピックアップし、ICF関連図上で検討することしました。限られた紙面に情報を載せることと、多職種間での共有も想定していたため、該当するICF-CYの分類項目をそのまま載せました。分類項目を探す際は、いわゆる「赤本」とともに、「7.5」で述べたICF-CY検索システムも利用しました。また、この「ICF関連図」の中には、ICF/ICF-CYには含まれない本人の気持ちに関する部分も設け、書き込みました（図2）。

心身の機能と身体構造	解説	ビジュアルアナログスケール	チェック
b1	種別機能		
b110	意識機能	*	
b114	見当識機能	*	
b117	知的機能	*	レ
b130	活力と欲動の機能	*	
b134	睡眠機能	*	
b140	注意機能	*	
b144	記憶機能	*	
b152	情動機能	*	
b156	知覚機能	*	
b164	高次認知機能	*	
b167	言語に関する種別機能	*	
b2	感覚機能と痛み		
b210	視覚機能	*	レ
b230	聴覚機能	*	
b235	前庭機能(バランス感覚を含む)	*	
b290	痛みの感覚	*	
b3	音声と発声の機能		
b310	音声機能	*	レ
b4	心血管系・血液系・免疫系・呼吸器系の機能	*	
b410	心機能	*	
b420	血圧の機能	*	
b430	血液系の機能	*	
b435	免疫系の機能(アレルギー、過敏症)	*	
b440	呼吸機能	*	
b5	消化器系・代謝系・内分泌系の機能	*	
b515	消化機能	*	
b525	排便機能	*	
b530	作業維持機能	*	
b555	内分泌機能(ホルモンのバランス)	*	
b6	尿路・性・生殖の機能	*	
b620	排尿機能	*	
b640	性機能	*	
b7	神経筋骨格と運動に関連する機能	*	
b710	関節の可動域の機能	*	
b730	筋力の機能	*	
b735	筋緊張の機能	*	
b765	予備運動の機能	*	
b8	皮膚および関連する構造の機能	*	
	その他の心身機能		

図1 ICF-CY チェックリスト (抜粋) のイメージ

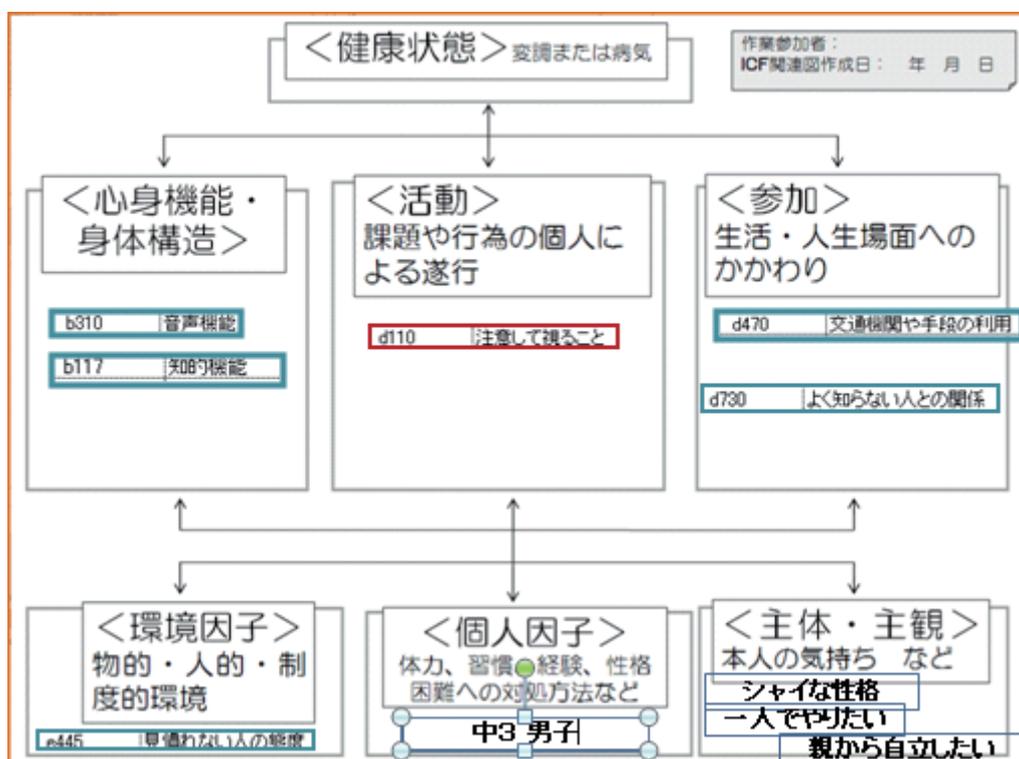


図2 ICF チェックリストから主な項目を抜き出して作成した ICF 関連図

「ICF 関連図」をもとに中学部内の関係者と保護者で何度かに分けて話し合い、B君の生活上の困難として「自力での登下校が難しい」ということに焦点を当てる必要があるとの結論を得たため、そのことに焦点を当てた「ICF 関連図」を作成し、さらに検討を進めることにしました(図3)。ここでは、具体的な実態を書き込むとともに、該当する ICF-CY の分類項目も併せて載せました。

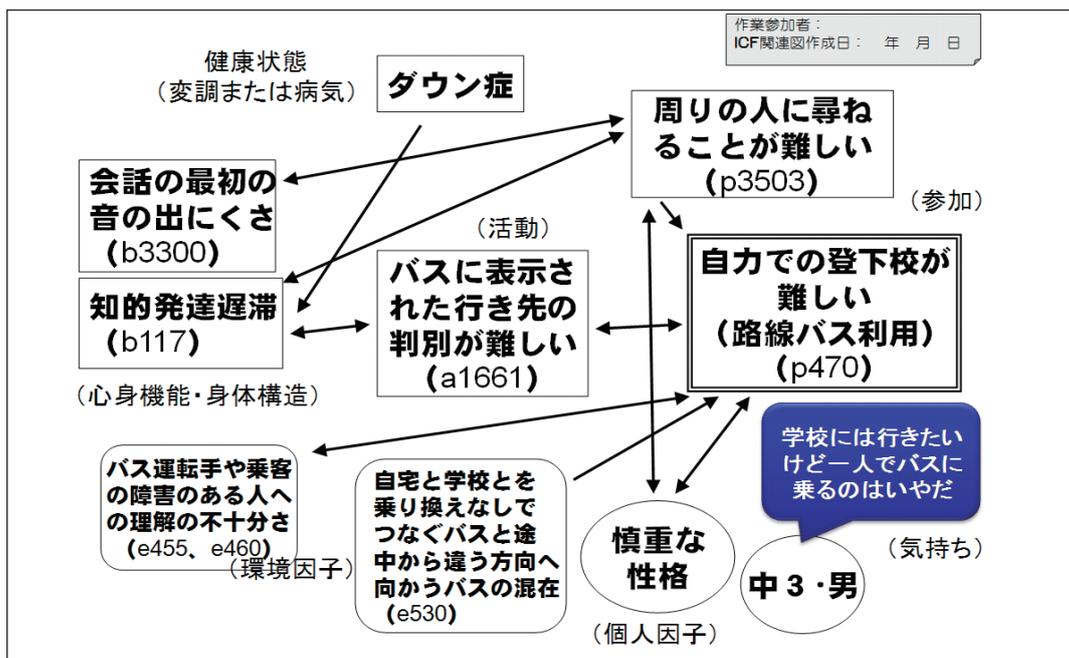


図3 自力での登下校にかかわる実態に絞った「ICF 関連図」

検討の結果、高等部入学後に路線バスを使って自力で登下校ができるようになることを目標にしたいということや中学部及び高等部職員、そして保護者・本人に相談しながら合意しました。その後、そのことをイメージした「ICF 関連図」を作成し、関係する要素や支援が必要な事項についての担当者の案を含めて学級担任が作り、保護者や校内の管理職、地域支援担当者等の協力を得ながら、各担当候補者に相談し、合意し、チームでアプローチをすることになりました。

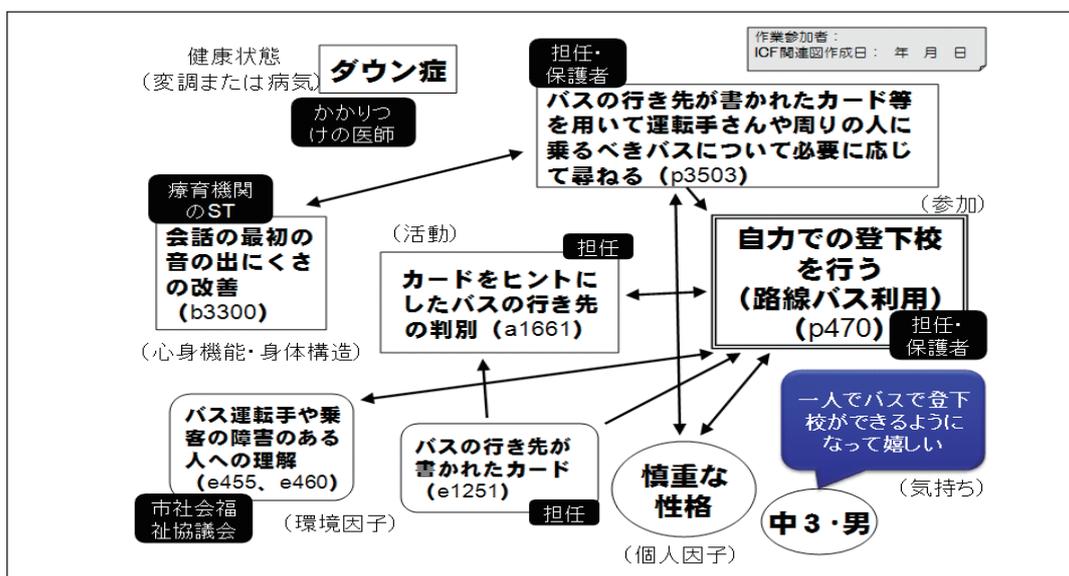


図4 自力での登下校を可能にすることをイメージした「ICF 関連図」

このチームアプローチの中で、担任としては、カードをヒントにしながらかの行き先を判別する力を身につける指導を自立活動の時間に行うことにしました。B君の認知機能等についてより丁寧に評価を行った後、具体的な目標を立て、学習指導要領に示された内容について、解説書に記載されたより詳細な内容を参考にしながら検討し、必要な指導内容を選定した上で指導を行うことにしました。

○上記④に該当する部分

中学部の3学期の時点で再度自力での登下校にかかわる実態図を担当が作成し、B君のことでなく、運転手の関わり等の環境因子も含めて評価し、B君の登下校の状況がどう変容したのか、高等部入学後、単独で登下校できそうかどうかの評価をしました。また、関係者間での確認も行い、その方向で進めて良いことが確認されました。

また、一連のICF/ICF-CYを活用した取り組みは効果的だったかについて評価したところ、B君について総合的・多面的に理解した上で課題が焦点化できたこと、本人・保護者も含めた共通理解のもとでチームアプローチができ、結果として目標が達成できたことは、ICF/ICF-CYの活用成果だったと考えられました。一方で、関連図作り等の作業に手間がかかったことが改善点としてあげられたため、今後は、電子化ツールを効果的に利用しながら取り組むことにしました。

5. 最後に

ここまで、試案について述べてきました。提案そのものが試案であり、さらなる検証が必要だと考えています。これらはあくまでも例ですので各学校等の実情に合わせ、本報告書に掲載した内容等を参照しながら最も適した方法で活用することをお勧めします。

ICF/ICF-CYには様々な活用があり得ますが、人の生きることの全体像（上田，2005）をとらえることが可能なICF/ICF-CYは、学習指導要領解説書自立活動編にあるとおり（文部科学省，2009）、個々の障害による学習上又は生活上の困難さを把握し、適切な指導と支援につなげ、子どもたちの学びを支えるものとして適していると考えられます。

文献

- 1) Akio Tokunaga, Koji Tanaka, Naoko Okubo(2008):Development of Training Materials to Utilize ICF-CY for Special Needs Education (SNE) in Japan. 第14回ICF北米協力センター会議.
- 2) 文部科学省（2009）. 特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編. 海文堂出版.
- 3) 大内進, イタリアにおける障害児教育とICF及びICF-CY活用動向. 課題別研究「ICF児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究（平成18年度～19年度）」成果報告書, 149-156. 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所.
- 4) 障害者福祉研究会編集・世界保健機関（WHO）（2002）. 国際生活機能分類—国際障害分類改定版—. 中央法規.
- 5) 徳永亜希雄, 笹本健, 大内進, 萩元良二, 西牧謙吾, 渡邊正裕（2008）. 本研究の成果と課題, 今後の展望. 課題別研究「ICF児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究（平成18年度～19年度）」成果報告書, 157-158. 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所.
- 6) 上田敏（2005）. 国際生活機能分類ICFの理解と活用 人が「生きること」「生きることの困難（障害）」をどうとらえるか. きょうされん.